

番号	2180956	呼称	ヨミ アブラバウ		
		油坊			
出典	書名・誌名 (4 巻 6 号/通巻 号)		執筆者	発行所	
	民間伝承		柳田 國男	民間伝承の会	
	論文名 (16) ~ () 頁		話者・資料 (引用)	発行年月日 (西暦)	
	妖怪名彙 (六)		(郷土研究 5 巻 5 号 S6 年 10 月 1 日)	S14 年 3 月 1 日 (1939) 年	
地域 (旧称)	掲載箇所 (16) ~ () 頁				
	滋賀 都・道 野洲市 区・町 近江 府・県 野洲市 村 (欲賀村)		採集年月日		
要約	油坊は、春の末から夏にかけて、夜に出現する怪火である。炎の中に僧形がよく見られるので、この名が付けられた。比叡山の僧侶で灯油料を盗んだものが、この火になったといわれている。				
アブラバウ 近江野洲郡の欲賀(ほしか)といふ村では、春の末から夏にかけて夜分に出現する怪火を油坊と謂ふ其火の焰の中には多くの僧形を認めるといつて此名がある。昔比叡山の僧侶で灯油料を盗んだ者の亡霊が此火になったと傳へられる(郷土研究5巻5号)。河内枚岡の御社に近い姥が火を始めとしてこの怪火には油を盗んだ話がよく附いて居る。或は民間の松の火が、燈油の火に進化した時代に、盛んにこの空想が燃え立つた名残かも知れぬ。越後南蒲原の或舊家に昔アブラナセといふ妖怪が居て家の者が油を粗末に使ふとすぐに出来て来てアブラナセ、即ち油を返済せよと謂つたといふ話がある(三條市郷談)。鬼火では無いが是と關係があるらしい。以前は菜種は無く皆胡麻油であつた。つまり今日よりも遙かに貴重だつたのである。					